

## 『ボヴァリー夫人』における 登場人物の食の情景

金 山 富 美

『ボヴァリー夫人』では、食卓の情景が頻出する<sup>1)</sup>。食堂、居間は、こと田舎にあっては一種の社交場でもあるのだ。「地方風俗」の副題をもつこの小説の女主人公エマがシャルルに異性として初めて身体の軽く触れるのも（こうして貧相なこの男が彼女にとっては現実の世界における初めての男性と意識され、「お嫁に来てからなの。それが起こったのは」<sup>2)</sup>と嘆息させる不幸な結婚のきっかけとなる）、後に死に場所となるヨンヴィル・ラベイへと足を踏み入れるところまで、新しい環境への歩みはほぼすべて食卓という場所から始まる。いや、その先も同様の例は続く。エマの服毒は、とある家庭の「ご飯中」(p.578)に並行して行なわれたものであった。そして、はや手のうちようのない状況で彼女が苦しんでいるそのとき、我々はまたその同じ家庭でなごやかに昼食の接待が行なわれている(p.585)のに立ち会わされるのである。

こうして眺めてみると、作家が食卓あるいは食の情景をもち出してくるのには、単に田舎風俗というものの雰囲気をかもし出す目的以上の、重要な何らかの意味があるように思われる。

一方エマを破滅させたのは何かと考えるとき、また別の疑問がわく。プールニジャン司祭の手によって「哀憐」と「免償」を受けようとするエマの末期のきわの描写を以下に記す。

[...] il récita le *Misereatur et l'Indulgentiam*, trempa son pouce droit dans l'huile et commença les onctions : d'abord sur les yeux, qui avaient tant convoité toutes les somptuosités terrestres ; puis sur les narines, friandes de brises tièdes et de senteurs amoureuses ; puis sur la bouche, qui s'était ouverte pour le mensonge, qui avait gémi d'orgueil et crié dans la luxure ; [...]. (p.588)

赦しのための聖油が、エマの鼻、次には「嘘をつくために開かれ」「高慢さゆえに嘆き」「邪淫の喜びに叫んだ」口へと塗られていく。しかし、安らかな臨

終は乞食の歌声で阻まれ、彼女は「電流を通された死体のように起き」上がり、彼女自身の「残忍で、凶暴で、絶望的な笑い」(P.589)のうちに打ち倒される。この容赦のない描写は、彼女の罪がとりわけ「傲慢」「羨望」「淫蕩」であったことを物語り、自らの環境、生れを顧みることのない彼女の、死を前にしても魂にとりついて離れぬ欲望の強さを印象づけている。このとどまることを知らぬ強烈な欲望は、彼女を破滅させたのと同様に、死後、夫シャルルに対し彼女の存在そのものとなって「草葉の陰から墮落させ」るよう働きかけ(P.604)、娘の将来に何ひとつ残させない。エマの凄惨な最期は、彼女の犯した罪が招かざるをえなかった結果であり、その罪は、彼女の短い一生を眺めてみるに、上記三つに加え、物欲、憤怒、怠惰と、ローマ教会が掲げた七つの大罪のほぼすべてにあたるであろう。ただし、これらのうち唯一《gula》(フランス語であれば《gourmandise》)<sup>3)</sup>のみを除いて。

19世紀は一般のブルジョワ階級が贅沢な食の楽しみを享受した時代であった。とりわけ帝政崩壊後はすさまじいほどの盛り上がりで、フロベールの書簡に少なからず見られる作家自身の食への言及も、その時代の雰囲気伝えていゝる。しかし『ボヴァリー夫人』には、食卓の描写の多さに加え女主人公が欲望の強さをその特性としているのにもかかわらず、読者に豊穰なる食のイメージというものが伝わってはこない。それは一体なぜなのだろうか。

本論文では頻繁に現れる食の周辺を『ボヴァリー夫人』に拾い、場面場面に果たすその役割、さらに、それがどのようにエマの欲望あるいは作品全体のテーマと関連しているのかを考察していきたい。

## I

食は、『ボヴァリー夫人』のいずれの登場人物にも足りている。乞食でさえ飢えた様子ひとつ見せず小唄を口ずさむ。もっとも貧しい食卓といっても免許医をめざすシャルルの下宿での「粗末な夕食」<sup>4)</sup>程度で、百姓であるエマの父ルオーの厨房も、カマーチョ<sup>5)</sup>のそれとまではいかないが十分豊かで暖かい<sup>6)</sup>。この小説世界では、美食の黄金時代と呼ばれた時期、一方に存在していた「満足に食べられない民衆」は不在である。食べものはフロベールによって「生きるため」に必要なものとしてよりも、むしろゆとりある日常的な次元における一種の「欲望の対象」としてとり上げられていると考えられる。

「欲望の対象」としての食、それは《gourmandise》の領域である。ただ、

いわゆる《gourmandise》は食の世界における一種の概念的な言葉であって、その中身は次のように分類されなければならない。《goinfrerie》（眼を覆いたくなるような見るからに卑しい貪り食い）、《voracité》（貪欲な食欲）また《gloutonnerie》（貪食、大食）、そして狭義の《gourmandise》（美食、食通ぶり）、さらに《friandise》（おいしいもの、甘いもの好き）である<sup>7)</sup>。最初の三つのあり方には、具体的にエマの結婚式、そして農事共進会での人々の様子があたるだろう。それぞれ食卓がしつらえられた荷車置場あるいは広場で、人々は食べる。

Jusqu'au soir, on mangea. Quand on était fatigué d'être assis, on allait se promener dans les cours ou jouer une partie de bouchon, dans la grange, puis on revenait à table. (p.317)

[...] les gardes nationaux étaient montés au premier étage de la mairie, avec des brioches embrochées à leurs baionnettes, et le tambour du bataillon qui portait un panier de bouteilles. [...] il (=Rodolphe) se promena seul [...] tout en attendant l'heure du banquet. Le festin fut long, bruyant, mal servi; l'on était si tassé, que l'on avait peine à remuer les coudes, et les planches étroites qui servaient de bancs fallirent se rompre sous le poids des convives. Ils mangeaient abondamment. Chacun s'en donnait pour sa quote-part. La sueur coulait sur tous les fronts; (p.429)

いわゆる田舎の風俗が示されていることはいうまでもないが、それに加えこの描写のあり方には、何よりも作家が、彼自身のとらえるひとつのマスとしての民衆の姿を、食の場面に象徴化していることがうかがい知れる。

きわめて日常的な食べものが文化にかかわる問題になるのはなぜかといえば、ある食べものに対して大衆が好みまたは嫌悪の感情を示したとき、それが大衆の意識の変化を示唆し、少なからずそちら側から経済へと影響を与えながら、社会全体をひとつの方向へと導く力になりうると考えられるためである<sup>8)</sup>。このような共通認識を考慮しつつフロベールの「食卓を前にした民衆」の描き方を眺めると、そこには現在我々がもっている認識の根本である「大衆によって作られる文化」への懐疑があるようだ。作家は何よりも、大衆の意志の存在の有無についてかなり否定的なのではなかろうか。「食欲を満たす」ことが第一で「損をしないよう、腹のそこまで食べものを詰め込む」ことしか知らぬ集

団というのは、嗜好、つまりひとつのクライテリオンをもちえぬ存在なのである。「人間を動物から分かつ唯一の事柄、それは飢えずして食い、渴えずして飲むということ、つまり自由意志」のはずなのに<sup>9)</sup>。こうした描写は実際、『ボヴァリー夫人』を経て約十年後に執筆された『感情教育』にも少なくない。七月王政崩壊時期のバリの描写には民衆の《goinfrerie》が挟み込まれ、フロベールはそれを眺める登場人物の一人に「胡散くさい話じゃあないか。あれが、民衆が主権者になるという図なのだから！」<sup>10)</sup>といわせている。

大衆の食べものに対する嗜好と文化との関係は、個人のレベルでは次のようにいい換えられる。身体にとり込む食物によってその身体が維持され、手にとる食べものはまさに当人の心の問題を反映する、と。もっともこれは、ある意味では西欧に古くからあるヴィジョンではある。例えばカトリックの世界では、宗教の戒律に則って食べものを選べば、その食べものはそちらの方から働きかけて当人の魂にまで影響を及ぼしてしまう<sup>11)</sup>。

ここで、主人公エマが人生の途上ですれ違った副次の人物の描かれ方に目を向けてみたい。フロベールが食卓あるいは食関連の記述によって、さほど頻繁に登場するわけではない彼らの社会における位置・層を、また一方、そうした社会的地位によらぬ裸の人間性を、ドミエのカリカチュールさながらに、短い描写のうちに印象づけていることが理解できよう。そして作家は、そうして与えられた印象の裏づけ、その当然の結末をきちんと用意している：

フェリシテーエマが起居振る舞い、言葉遣いすべてにわたりしっかりと上流風にしつけたつもりのこの14歳の孤児の娘は、毎晩、奥さんが寝静まると、食品戸棚から「砂糖を少しずつ盗み出しては寝床で一人こっそり食べる」(P.345)。エマの死後、勝手に彼女の着物を身につけ、しまいには衣装箆筒に残っていたものをすっかりさらって男と逃げる(P.604)／公証人ギョーマン—銀製の食卓用こんろにカットガラスの扉の握り、そして英国式清潔さにあらゆる調度が輝いている自宅食堂。エマの嘆願に耳を傾けながらも、空色のネクタイに顎を埋めるようにして「自分のコートレット」を食い「自分の紅茶」をすすめることを「少しもやめない」(P.567)。エマをものにできそうだと感じるや、急に自分でも耐えかねるほどの激しい情欲を抱き、拒否に会うや「深入りすることなく済んでよかった」と独りごつ(P.568)。人の「心の機微をまるで理解せず」(P.378)、終始一貫、自己満足と自己弁護のうちに生きる／ビネー—「口に合わないものを食べさせられるなら殺された方がまし」という「金獅子」の女将

泣かせの常連。村の人々とは距離を置いて暮らし、当然食事はいつも一人きりでとる(P.359)。「社交人たるの素質まるでなく」「芸術家のような執心とブルジョワの独善主義」(P.360)のもち主。村の知り合い連中の中でただ一人、エマの葬儀に顔を見せない／シャルルの父－怠惰と贅沢好きで生活を逼迫させ、快活で朗らかだった妻をたちまちのうちにちょうど「気が抜けた葡萄酒が酔になったような」(P.296)気難しい女にしてしまう。「恐れを知らぬ人物」(P.374)で聖金曜日には「アンドゥイユ<sup>12)</sup>を食わずにはいられない」(P.488)。カフェの入り口で宗教の慰藉を受けられぬままに急死する(P.520)／エマの父－幼い娘エマを残し妻が他界して以来「厨房で一人暖炉に向かい、まるで舞台のようにすっかり料理を並べさせた小卓」で「うまい食事をし、よく暖まり、気持ちよく寝る」ことだけが望み(pp.312-313)となる。将来によかれと思ひ医者へと嫁がせた娘が、彼女の生れを望みの叶わぬ原因のひとつであるとして「神の不公平」と呪い、百姓である自分を軽蔑している(P.352)ことに気づく感受性はない。一方、彼には、結局は一度も会うことのない孫のために杏の砂糖煮を作りおきしたり、エマの死後悲嘆のどん底にありながら、婿のシャルルを前に「心配ご無用。七面鳥はこれからも送り届けるよ」(P.602)という言葉はくなど、素朴な愛情と、人生の悲しみ、苦しみをことごとく時間と習俗の流れの中で受けとめていく百姓の姿がある。

以上挙げた各人物のうち、女中のフェリシテ以外には、《gloutonnerie》だけではないある種の食べものへの嗜好が見られる。とはいえ、いずれの場合も、食そのものに積極的な喜びや発見を見いだしているとはとてもいえない。また会食者 *compagnon de table* の欠けた一人きりの食卓、およびその状況における彼らの満足感、安逸（食に金のかけられるわが境遇にご満悦という様相、あるいは叶えられなかった人生を食卓という狭い世界で慰謝しようとする自己欺瞞）には、「自分の連想を他人のそれと結合させよう」とはしないこれらの人物の精神が露頭されている<sup>13)</sup>。むろん、自らを「靈魂の医者」と呼ぶブルニジャン司祭(P.394)とて決して例外ではない。「司祭様はどのような悩みでもやわらげて下さいます」と魂の救済を哀願するエマに、彼はただ「人間よく暖まって腹一杯食べられさえすれば、そんなもの」と答える。つまりこの「乾物屋のような精神」<sup>14)</sup>の司祭に根本的にある考えとは、御大層な教義とは裏腹に、「パンがあり冬に薪があれば極楽」<sup>15)</sup>ということなのである。

かくのごとき人々に囲まれ、またかくのごとき司祭によって最期の塗油を受

けざるをえぬエマの境遇は、まさしくボードレールのいう「騒然たる悪魔伝の孤独地獄」<sup>6)</sup>である。フロベールはこうした人物を至るところに配置して食わせ、飲ませ、そしてその同じ口で喋らせ、精神性も抒情性のかけらもない、あくまでも俗な《gourmandise》をエマの周囲に放散させる。そこからかもし出されるプロザイズムは、エマのロマンチシズムの対極にあって、苦悶しつつ出口を捜し求める彼女の魂のはばたきを我々の耳に一層虚ろに響かせるのに大きく貢献している。このことは、彼女の愛情の対象として登場させられているより近い人物達においてはなおさらであろう。次にシャルル、ロドルフ、レオンを食の周辺から眺め、改めてそれを確認するとともに、彼らの欲望それ自体と、その彼らがエマ・ボヴァリーの欲望に対して果たす役割について探る。

## II

エマはシャルルとの結婚により少しも面白くない田舎から抜け出す。新しい生活では、少なくとも娘時代のように一人「冷え冷えした食堂で」「ブルブルと震えながら食べ」た(P.305)ことなど遠い昔の話になってしまうだろうと思う。が、トストの家に入るなり認めたのは壁紙がたるんで張ってある食堂兼居間になる部屋、その鼻孔が嗅ぎとったのは「患者が診察室の中で咳き込んだり容体を喋ったりするのが台所まで聞こえ」るのと同様「診察中にも壁を通して匂ってくる小麦粉とバターを炒める匂い」であった(P.320)。数日をかけて、懸命に家の中の模様替えをする。近所の人を夕食に招待すれば洒落た料理 *plat coquet* を出し、スモモの盛り方も心得たもの、壺入りジャムはきちんと皿にあけて供する。デザート用にフィンガーボールを買いたいとまでいう(P.329)。エマは恋、情熱、陶酔など修道院での読書が彼女に教えてくれたことどもを、あるいは結婚式の日、遠路イヴトーからよこした菓子屋に作らせたピエス・モンテに描いてあったイメージ<sup>7)</sup>を、是が非でも結婚生活の中に再現しようとしている。ところが当のシャルルは「すぐに食べたく」、肉と玉葱の煮込みの残りでよい。そしてチーズの皮をむき、リンゴをかじり、水差しを空にすると、仰向けになっていびきをかく(P.329)。結婚前「身持ちがよく、しまり屋で学もある」と評判だった(P.313)この男の欲望は、百姓である彼女の父親ほども入り組んでいはいはしない、まったく単純な、毎日必要な分だけの《gloutonnerie》なのだ。フロベールはシャルルの食に対する欲望の形態を、その人生の欲望と完全に見合ったものに設定している。無論、愛情についても同様で、エマを抱

くのもそうした習慣のひとつ、「単調な食事の後で出る、すでに内容の分かり切ったデザートのようなもの」(P.331)、と作家は続ける。

Elle le charmait par quantité de délicatesses ; c'était tantôt une manière nouvelle de façonner pour les bougies des bobèches de papier [...], ou le nom extraordinaire d'un mets bien simple et que la bonne avait manqué, mais que Charles, jusqu'au bout, avalait avec plaisir. (p.346)

何でもない家庭料理や女中の作り損ねた料理を形容するために、エマはきらびやかで「大仰すぎるほどの名前」をひねり出す。あるときには少々やけっぱちに、またあるときは苦心して。そこに若妻の求める情熱、陶酔を連想させるような表現<sup>18)</sup>が用いられていたことは、想像に難くない。同時にそれは、彼女が直接には伝えることのできないメッセージであったはずである。すぐ後に続く《et que [...], mais que [...]》の部分には、エマの心を読みとれぬシャルルのおめでたさ、愚かさに対する渋面を感じ取られる。シャルルはエマの行為をじっくりと味わうべきであった。が、残念なことに、彼は文字通り「一気に飲み込んでしまった」。

こうして、エマの精神の食卓は相も変わらず一人きりである。しかも以前にもまして耐え難いのは、自分の目の前に、もはや心通わせることが不可能としか思われぬ「夫」が、太ったために一層鈍重な様子で「食べた後で歯を舌でなめ回し、スープを一口ごと喉を鳴らしながら飲」んでいることだ(P.351)。きれいに整えた食堂は、食卓と人生の両方において《compagnon》たりえぬ夫<sup>19)</sup>を、日に何度も、それも毎日面と向かって意識せざるをえない場所である。食事の時間はそれゆえに生理的に我慢ができぬ。「ゆっくり食う long à manger」シャルルとうんざりする匂いを立ち昇らせるブイイ<sup>20)</sup>(P.351)の双方は、エマが嫌が応でも毎日その皿に載せて口に運ばざるをえない唯一の選択対象なのである。

こうして「水を恋しがる調理台の上の鯉のようにアップアップと口を開けている」(P.410)エマに眼をつけたのは、ロドルフ・ブーランジェである。シャルルにはない風采の良さ、ヴォピエサールの館で出会った子爵を思い出させるヴァニラとレモンの匂い(ベッド脇の小卓にレモンと角砂糖を欠かさないためである。ヴァニラの香りは「ランスのビスキュイ」のせいかな)、そして豪胆さがあり、まるで赤子の腕をひねるようにエマを征服し、ほどなく捨ててしまう。

ロドルフのエマへの関わり方には、作家自身、多少とも同胞としての情を交えているように思われもすれば、実際とりたてて卓越した悪人ぶりであるわけでもない。この男を形容しようとするれば、チボーデが指摘したように彼の独白を考慮すれば浮かび上がってこよう<sup>21)</sup>。が、さらに、ベッド脇にこの男が揃えさせた小物と、以下に挙げる彼の食欲と嗜好についての描写もまた、もうひとつの解答の方法を示してくれる。

屋敷と農場二つを所有する地主ロドルフは、立派な洒落者ぶりで贅沢な食事や嗜好品にける十分な金もち、狭義でかつ深い意味での《gourmandise》の条件は何一つ不足していないように思われる。しかし、農事共進会の宴会を待つ姿(Iに記した場面-P.429-を参照)はどうであろう—エマを口どき、家まで見送った後で、ロドルフは宴会の食事でありつくために再び雑踏の中に戻ってくる。「ろくなものも出なかった」とはいえ、彼もまた大衆に加わって食べ、エマとの間に今後始まるであろう恋の毎日を思い描きつつ、しかし「自分の割り前分」はしっかりと忘れず「コップ一杯なみなみと注がせた」葡萄酒を口へ運ぶ(P.430)。エマに飽いてしまっても「この恋愛の中にまだ利用すべき享樂のあることを認める」(P.466)ので、彼女を無遠慮に扱いつつも愛人関係を続行するというこの男の精神において、恋愛に対する姿勢と食べものに対するそれとの間には、何ら相違点などないのではなからうか。また作家は我々に、この誘惑者が、女達からの手紙、贈り物、そして髪の毛までをすべて「ランスのビスキュイ<sup>22)</sup>が入っていた古い箱にしまっておくことにしている」(P.475)と知らせる。多くの女達が捧げた愛情は、ロドルフにとって甘ったるい口慰みの菓子と変わらず、また同様に、どれもこれも似たりよったりの、均一化されて箱に詰められた埒のない代物《Quel tas de blagues!》にすぎない。ロドルフという人間の特徴、それは見せかけの《gourmandise》、けちな《gloutonnerie》が、食と恋愛に共通して存在していることなのである。

フロベールの「全体が緩慢で、力強い渦巻きが絶えず旋回する流れのような印象を与える」<sup>23)</sup>半過去によって、シャルルがエマにとっての「人生のブイイ」と表現されているならば、一方のロドルフは、娘時代から百姓らしく林檎酒を少しばかり飲むことしか許されなかった彼女にとって、それと知らず質のあまりよくない強い「酒をデギュステ<sup>24)</sup>すること」であった。彼女は「マルヴォワジーの葡萄酒<sup>25)</sup>の樽に浸って溺れ死んだクラランス公のように」(P.466)麻痺、陶醉させられ、語り手に「底深くに秘められ、ほとんど精神的といってよいほ

ど」といわしめる(P.545)淫らさを習得する。

次の愛人レオンとともに過ごす「ブーローニュ・ホテル」での三日間は、まるまる一章を費やして語られる。「まことの蜜月」。その間中、毎朝、部屋にアイス・シロップを運ばせ、島の居酒屋でキュウリウオのフライやクリーム、サクランボをともに味わう(P.524)。エマはこの年若い恋人に、ロドルフとの間には生まれなかった食事共有の喜び(フロベールは、エマとロドルフ二人一緒にの飲食シーンはひとつとして提出しない)つまり一緒に生きているという実感(その結果からすると、あるいはこれは一種の幻想と呼ぶべきかもしれない)と、シャルルとの生活には見だし得ぬ甘さと上品さを味わおうとしている。

間もなく彼女は案の定「男らしいことのできぬ、弱虫で、平凡で、女より女々しく、その上けちで意気地のない」レオン(P.548)と「この不義の中の結婚生活のあらゆる平凡さ」(P.556)を発見する。案の定、といったのは、レオンが「詩人の名残を秘めた」(P.555)若きギョーマンにすぎず、「金獅子」の女将の言葉を借りれば「いつ何を食べようが気になどしない」(P.359)、いい換えれば、その精神を包む肉体の面からも元来ロドルフほど強い欲望をもたない優柔不断な男で、その点ではむしろシャルルの人間性に連なっているためである。レオンの方が彼女のまるで「情婦になり」、情人の考えも趣味もことごとく受け入れる(P.544)のは決して不思議なことではない。「好みの上品な」この若者は、エマに「淑女 *femme du monde*」である上に人妻、つまり「本当の情人」(P.533)をしばらく味わうと、今こそ自重すべきときと、ある時期エマと共通しているように見えた激しい情感と空想を捨て去り、地道に書記長への道を歩むことにする。世間体をはばかりとともに、すでに「妙味のわからなくなった」(P.556)恋の喧噪にうんざりしたのである。

エマがその欲望の矛先を向けた人物達の食とその欲望を通して彼らの裸の人間性とエマとの関り合いを確認すると、結局のところ身近に存在した男達の欲望はことごとく、プチブルの域を出るものではないということが理解される。それは彼女自身の欲望とは決して交わず、彼女が求めれば求めるほど、双方の乖離は大きくなる。こうしてエマの魂が必死に赴こうとする先にまで、ここかしこに色濃く燻らされている卑俗さの中、彼女というよりも彼女の欲望そのものが浮かび上がり、しだいにその激しさを増してくる——欲望はもはや当初

望んでいたような幸せな結婚、それを可能にしてくれるはずの「美男子で、才気にあふれ、上品で、魅惑的な」夫(p.331)などという単純なものに向かっているのでなく、「焼けつくような追憶、このうえなく美しい読書の思い出、そして限りなく強烈な欲望」により心の中に作り上げられる漠とした姿の「別の男」(p.556)、正確に言えば、それに象徴される幻想そのものをわがものとするのである。ロドルフ、レオンという二人の情人によって、それぞれ恋愛の酩酊 *enivrement* とその砂糖菓子のような甘美さ *douceur* を味わおうとしてもたどり着くことの不可能なわけはそこにあるのだ。

幻想をわがものにしたいという野望はいつから彼女の魂の中に芽生え、成長していったのだろうか。娘時代から夢想癖があるとはいえ、それが野望となり文字通りそれらしく膨れ上がっていくのには、当然ながらひとつの経験と自信が必要であった。ヴォピエサールの晩餐会の夜へと引き返し、改めてエマの欲望を眺めてみる。

### III

その晩餐会は、エマにとって、まさに「尋常ならざる出来事 *quelque chose d'extraordinaire*」(p.332)であった。彼女はそこにあるすべての「もの」を前にして陶然と立ちすくみ、身も心もその雰囲気に取り込まれてしまう。

*Emma se sentit, en entrant, enveloppée par un air chaud, mélange du parfum des fleurs et du beau linge, du fumet des viandes et de l'odeur des truffes. [...] des bouquets étaient en ligne sur toute la longueur de la table, et, dans les assiettes à large bordure, les serviettes arrangées en manière de bonnet d'évêque, tenaient entre le bâillement de leurs deux plis chacune un petit pain de forme ovale. Les pattes rouges des homards dépassaient les plats ; de gros fruits dans des corbeilles à jour s'étagaient sur la mousse; les cailles avaient leurs plumes, des fumées montaient ; et, en bas de soie, en culotte courte, en cravate blanche, en jabot, grave comme un juge, le maître d'hôtel, [...] faisait d'un coup de sa cuiller sauter pour vous le morceau qu'on choisissait. (p.335)*

「司教帽の形に畳まれたナプキンがその襷の間に挟んでいる小さな卵形のパン」「真赤な脚が皿からはみ出しているオマール海老」「苔の上に段をなす、透かし細工の籠に盛った大きな果実」「羽毛つきのまま湯気を立ち昇らせている

鶉」はみな「食べられる」本来もっとも受動的な「もの」であるはずだが、今や主体性をもって居並び、すぐ後に並列された給仕長以上に厳めしく強烈な存在感を印象づける。実際エマ自身がそのように眺め魅入られているのだ<sup>26)</sup>。

ここで医者の妻は具体的に二つのことを学んだ。ひとつは、上流社会の女性は酒を断わらないということ（「ボヴァリー夫人はグラスに手袋を入れないでいるご婦人方が幾人もいることに気がついた」）一以降エマはもはや以前のように酒に対して消極的ではなくなり、思いきりとやけっぱちも手伝って、大ぶりのグラス半杯のブランデーを平気で飲み干しシャルルを驚かせる（P.405）。もう一方は、昔、本でしか知らなかった王妃の恋人を直に見て、その実在を確信したことであった。

Pendant, au haut bout de la table, seul parmi toutes ces femmes, courbé sur son assiette remplie et la serviette nouée dans le dos comme un enfant, un vieillard mangeait, laissant tomber de sa bouche des gouttes de sauce.  
(p.335)

女性客のテーブルに一人混じり、まるで嘗め回すように「ゆるみ切った目蓋の奥の充血した眼」を料理の上に這わせ、「どもりながら指さす」この「唇の垂れた」老人の食欲こそ尋常ではない。それは「生きるための」食でもなければ、もはや「味わうための」食でもない。あらゆる欲望が混淆した、死、狂気と隣り合わせの《goïnfrerie》である。エマの眼は「何か普通でない、尊いもの」を見るように（P.336）たえずそこへと戻っていく。料理を貪る老公爵の様子は彼女の瞳に醜悪に映りはしない。それどころか、エマは、その豪奢な雰囲気と内容とで自分を圧倒する《gala》の料理に対して、それらを堂々と、果敢に、羞恥心のかけらもなく次々と平らげていく老人に、過去の放蕩三昧、華麗な恋愛遍歴もさもあらんと驚嘆しているのである—「この方は宮廷で生活し、女王達のベッドで寝た人なのだ！」。エマはここで、初めて自分の《convive, compagnon de table》が、いや人生のそれが誰であるかを悟ったのではなからうか。ワルツも申し込まれ、彼女はその夜申し分のない上流社会の女性客の一人である。彼女の小さな脳髓の中で、老公爵の華やかな逸話とワルツの相手であった子爵の優美な姿と香り、豪奢な料理の数々がすべてオーバーラップしてしまう。

On versa du vin de Champagne à la glace. Emma frissonna de toute sa peau en sentant ce froid dans sa bouche. (p.336)

[...] madame Bovary tourna la tête et aperçut dans le jardin, contre les carreaux, des faces de paysans qui regardaient. Alors le souvenir des Bertaux lui arriva. [...] ,et elle se revit elle-même, comme autrefois, écrémant avec son doigt les terrines de lait dans la laiterie. Mais, aux fulgurations de l'heure présente, sa vie passée [...] s'épanouissait tout entière, et elle doutait presque de l'avoir vécue. Elle était là ; [...]. Elle mangeait alors une glace au marasquin, qu'elle tenait de la main gauche dans une coquille de vermeil, et fermait à demi les yeux, la cuiller entre les dents. (p.338)

「搾乳場で壺に入れた牛乳のクリーム分を指ですくいとっていた自分」こそ幻だ。なぜなら、今このとき「全身を身震いさせるほど」冷たく冷やしたシャンパンを彼女は「口中に感じ」、またマラスキーノ入りアイスクリームの盛られた金メッキした銀の貝殻皿を「その左手にもち」、「匙を加えたままで」甘いものが軽い酔い心地を残しながら少しずつ舌の上で溶けていくのを感じつつ、自らがそのオリンポスの神々の宴の一員として「そこにいる」のを「細く閉じた眼」で観ているのだから。

彼女の身体精神両方の奥深くにこの記憶を定着させたのは、食べものである——「食欲は夢と似たところがある。記憶と幻覚とを備えているから」<sup>27)</sup>。けれどもそれは、酔いと甘さ、冷たさ、そして身体を培わない脆弱な食べものである。当夜、見るからに食欲をそそる滋養に満ちかつ豪勢な料理の居並ぶ中、フロバールはエマが食べたものを酒とデザートしか記してはいない。この食の形態は、しばし現実にその手に掴んだ豪華な生活への興奮、圧倒を通して胸に欲望を膨らませているエマの精神の一方にある、彼女の生身の肉体の反応であろう。がしかし、これが以来、輝かしい追想と結びつき、彼女の中に生理的な面で完全に定着してしまう。サント＝ブーヴによる「彼女はその場の香りに中毒する。それは血管の中にしみ込み二度と再び抜け出ない」<sup>28)</sup>の評はこの意味で至言である。身体を保つ実質的な食べものを口にしたり、眼にすることさえエマは我慢がなくなる。帰宅後のご馳走「玉葱のスープと仔牛肉のスカンポ添え」は色あせ、それを前に嬉しげにもみ手をする夫も閉口(p.341)である。「ブイイの湯気とともに魂の底からまた別の胸の悪くなるような息吹 bouffées d'affadissement が立ち昇ってくる」(p.351)。こうして彼女の食卓は、「はしばみの実をかじったり」「自分だけのために料理をいくつも作らせては少しも手をつけな」かったり「ある日は純乳しか飲まず、またある日は紅茶ばかり12

杯も飲む」(P.351)あるいは「痩せるためといって酔を飲む」(P.352)など、身体を損なうもののみで、豊かな快樂と結びつくどころか涸渴へと向かっている<sup>29)</sup>。

フロベールは書簡に「散歩から帰るや鹿のパテを食べ、白葡萄酒を飲みたいという猛烈な欲求を感じた。唇が震え、喉はからからになるほどだった。自然を眺めることが僕の魂を創造の神へと誘うどころか胃袋を刺激するとは奇妙な話だ」<sup>30)</sup>と告白しているが、作家の生身を刺激した自然にあたるものは、彼の女主人公にあってはヴォビエサールの夜を思い出させる物質と官能の贅沢であろう。以来わずか数例ばかり提出されるエマが食欲を出すシーン<sup>31)</sup>は、これらの欲望に付随して初めて、発作的、病的に起こる—— Elle devenait irritable, gourmande, et voluptueuse (P.543)。そして欲望に満ちた人生の仕上げにと彼女の食欲が向かったのは、砒素であった。

[...] elle alla droit vers la troisième tablette, tant son souvenir la guidait bien, saisit le bocal bleu, en arracha le bouchon, y furra sa main et, la retirant pleine d'une poudre blanche, elle se mit à manger à même. (p.579)

青い瓶から手一杯につかみ出した砒素は、晩餐会の夜の「よそのよりずっと白く細かに見えた」(P.336)粉砂糖 *sucre en poudre* のようにも思われるではないか。エマは敢然と「そのまま食べた」。「氷のような冷たさ *froid de glace* が足先から心臓まで昇ってくるのを感じる」(P.580)——あの夜の感覚との擬似——「ほうら、いよいよ始まった *Voilà que ça commence!*」とつぶやくエマ。砒素は、彼女の人生に不可欠なひとつの「食べもの」であった。

我々には今、人生の《*enivrement*》や《*douceur*》を味わおうと<sup>32)</sup>してロドルフとレオンに傾いていったエマの、そのはかない行動が、彼女の記憶の地下茎で「自分はこのために生まれてきた」と信じている晩餐会への途方もない憧憬と羨望とに駆り立てられたものでもあったことを疑いはしない。エマ・ボヴァリーは、美食がその人間に深く植えつけた、もの苦しいほどの幻影、官能によって内側から浸食された女であった。いきおい、そこには実質的な食とそのイメージが希薄になり、七つの大罪の四番目である《*gourmandise*》は以上のような過程および理由によって不在ということになった。と同時に、ひとつだけ欠けたこの罪の前後にある「羨望」(顔色が悪くなるもと)と「淫蕩」(痩せ細りのもと)が突出するのである。

エマの殺伐とした食卓の風景に「ボヴァリー夫人は私です。私からとったの

です」というフロベールの告白を考慮してみると、食を享樂する時代に身を置きそれを楽しむ傍らで、作家がそこに「髪の中の一杯浮かんだ不味いポタージュのような」「おぞましい人生」<sup>33)</sup>、「実利的な生活」<sup>34)</sup>を見、さらに人間の止む難い「食べる」という行為の先に、狂気じみた欲望や死あるいは虚無を意識していることが強く感じとられる。ちょうど優雅なモードに身を固めた美しい女に彼が骸骨を見ていたのと同様に。

登場人物の中で、実際エマほど実利的な食、家庭の団欒が似合わぬものはいないであろう。彼女の意識はいつも現実から離れようとする。そうした意識と現実の隔離を読者に明確に知らしめるシーンに、フロベールはまた食卓を用いている。ロドルフからの別れの手紙を読みながら咄嗟に窓から身を踊らせようとするエマをとどめたのは、フェリシテの「お食事ができました」との呼び声であった——「下りねばならない。食卓に着かねばならない」(P.479)。またエマがオメー家へ自殺をしに行くシーンでは、彼女が砒素を食べてこの世の生から逃れようとするそのとき、食堂からは家庭料理 *cuisine bourgeoise* を前にした家族の「皿に触れるフォークの音」(P.578)が聞こえている。悲劇性は卑俗な日常性の傍らにあって一層深い陰影を帯びる。

\*\*\*

我々は最後に、オメー一家についても少し触れておかななくてはならない。ここそ『ボヴァリー夫人』で唯一「暖かい団欒」のあるところであり、民衆のシーンにひけをとらぬ、実利的な食がもっとも似つかわしい人々、食べものを十分に身体にとり込みしぶといエネルギーを蓄える面々がいるのである——「オメー一家は大人も子供も顎まできっちりとおエプロンをかけ、手に手にフォークを握っていた」(P.516)；「オメー夫人は、四旬節の折に塩味のバターをつけて食べるターバン形のどっしりした小型パン(シュミノーパーン *cheminot*)が大好物であった。この野蛮な時代の食べものの最後の標本とでもいべきもの[...]を薬剤師の妻はひどく歯が悪いくせにノルマン人さながらに勇ましくガリガリ食べる」(P.564)など。次第にその存在感が薄れ衰退していくボヴァリー家と家族全員強健なオメー家；霞を食べて生きる不倫妻エマと、古代人の食欲をもち四人の子供を次々と生み落とす「ノルマンディーきっての世話女房」(P.378)オメー夫人；周囲から見放され、切り離された環境に置かれた死に瀕したエマとなす術もないシャルル、と、そこから視線を少し移

せば名士ラリヴィエール博士らを昼食に招待している社交性にあふれたオメー家がある。ボヴァリー家とオメー家はすべてがまったく逆の方向を指し、しかし両家ともものすごい速度でその道先へ先へと辿っていく。さらにもう一点、この一家の大黒柱オメーには、エマを活かしそして殺した欲望と明らかに区別されるべき彼ならではの欲望があり、それが食の周辺にちりばめられていることに注目しなければならない。

「ラゲーを作るコツや調味料の衛生的方法」を知り、「香料、エキス、肉汁、ゼラチンを論じることができ」「ジャムや酢、甘口リキュールを作るのが得意で、また新案の経済こんろやチーズ保存法、腐った葡萄酒の手入れ法まで心得て」(pp.379-380)いるこの上なく良き隣人。ジャム作りの季節ともなれば「とりわけ薬剤師の店先には大きなバラ色の山が築かれ、人々の賞賛のまどである」(P.516)。コーヒーも「自分で煎り、自分で挽き、自分で混ぜ合わせ」て食卓の上で沸かす(P.587)。「薬局が薬瓶で一杯になっている以上に、頭の中がものの製法で一杯な」この薬剤師からは、非常に巧妙に、食べものもっている「身を養うための、味わうための」第一義的な面が抜きとられている。オメーは食べものを味わうわけではない。彼は作り、分析するのである。そこにはちょうどエマにおいて《gourmandise》が彼女の強烈な別の欲望にすり替えられていたと同様の現象が見られる。彼は食べものに砂糖を加え、酒を醸造し、「季節を固定させる」<sup>35)</sup>。それは腐敗の運命にある物質を保存するという人間の能力を誇示しており<sup>36)</sup>、一種の錬金術にも譬えられるだろう。オメーにおける食の周辺には、科学と進歩、19世紀の「現代生活の夢」に通ずる内容がある。彼はチョコレート界の大発見に注目して実業家として成功し、新発見といつも足並みを揃えて薬剤師としても順調、ジャーナリズムの世界に進出すれば『林檎酒とその製法および効果』と題する研究報告等々で学士院会員にもなる。そして「景気よく朗らかに」何もかも満足の行く状況にありながら、いやそれゆえに、次には、世間における最高の名誉、勲章への欲望に「もの苦しいほどさいなまれる」(P.608)。フロバールはオメーに欲望をことごとく成就させる。それはいつだったか、大衆の歓呼の声と輝かしい栄光とに彩られ、作家を夢見る一青年の視界をよぎっていった、同時代人アペール<sup>37)</sup>などの科学者やジャーナリズムと歩調を合わせて時代の寵児となった作家連中<sup>38)</sup>の似姿でもあろう。文学への野望に「身を食わせ」<sup>39)</sup>、いつしか「人間どもを文章のフライパンの中で揚げものにし栗のようにはじけ飛ばせてやろう」<sup>40)</sup>と豪語しながら日陰のよ

うな生活を送る若きフロベールの傍らを。

食はきわめて芸術的な世界から遠いように思われ、文学の中ではなかなか語られにくいものである。特にロマンチズムの漂う作品においては、その種の場面はほとんど形骸化された状態でしか見られぬように思われる。けだし、食の世界は我々にもっとも近く、しかしもっとも遠いのである。ラブレーはけれどもあの巨人物語で、「腹」を宇宙的規模に等しい壮大なテーマにまで仕立て上げたのではなかったか。そしてフロベールは——我々は今理解する——食を語ることによってそれぞれの欲望の色合いや強さを浮かび上がらせ、各々の人物の「味」(味気なさや水くささ)、「香り」、そしてまた様々な感情の甘味や苦味、さらに時間を経て思い出となったそれらの強い後味を、まるで目の前にあり、手を伸ばせばその感触を感じられるほどに直接に強く読者の感覚へと伝えてくる。とともに、感情、幻想の世界に生きる人間の滅びと、それを横目にもう一方の極に身を浸かるもの達の行進を、一瞬の閃光のもとに光と陰として描き出すのだ。彼の描写の身上は、そうして、口中にそのバサつき、感情には惨めさを残す黒パンをあくまでも黒く、白パンはあくまでも柔らかく白く、読者の眼前に輝かせて見せることなのである。そこには一般に受けとられるような尊卑、善悪、美醜等の区別を超えて、この世界に存在するすべてのものに対する尊厳があるのではなからうか。

「甘い砂糖水のこの世紀に火酒を注ぎたまえ。ブルジョワを一万一千度のゲログに浸したまえ、そして彼らの喉を焼いてしまうことだ。苦痛の悲鳴をあげさせるのだ」<sup>41)</sup> ——フロベールの描く食の情景は、きわめて形而上学的な問題をも含むものといえる。そしてそこにはまた、19世紀に大きく発展した食文化が内包する、一種の屈折した精神が暗示されているといえよう。これについては、また別の機会に論ずることとしたい。

## 註

- 1) もっともフロベールの他の作品のいずれにも、この傾向は見られる。『サランボー』では神官や元老、そして群衆が居並ぶ目映いばかりのカルタゴの富豪の饗宴、『感情教育』では社交界の晩餐、『聖アントワーヌの誘惑』ではネブカドネザル王の地平の果てまで伸びる食卓等。Jean-Pierre Richard はそ

の *Littérature et Sensation* (Editions du Seuil, 1954) の中で《On mange beaucoup dans les romans de Flaubert》と指摘している。彼はフロベール作品全般に見られる食のエピソードを作家の書簡と結びつけて論じ、文学創造に対するこの作家独自の姿勢、潜在意識を分析している。

- 2) Gustave Flaubert, *Madame Bovary, Flaubert Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1979, p.391. 以下 *Madame Bovary* (M.B. と略記) からの引用はすべてこの版により、本文中の括弧内の数字は出典ページを示す。
- 3) 「食道、咽喉」あるいは「食への欲望」「貪食」の意。C f. 註7)
- 4) le maigre dîner : M.B., p.299. フロベールは自分の寄宿生時代の経験を踏まえ (Cf. G. Flaubert, *Lettre à sa sœur, Caroline*, 16 novembre 1842), 《maigre》に「量的に十分でない」と「肉があまり入らず内容が貧しい」の両方の意味を込めている。
- 5) セルバンテス作『ドン・キホーテ』続編第二十章のエピソードに登場する長者の名。
- 6) 《Une jeune femme, en robe de mérinos bleu garnie de trois volants, vint sur le seuil de la maison pour recevoir M. Bovary, qu'elle fit entrer dans la cuisine, où flambait un grand feu. Le déjeuner des gens bouillonnait alentour, dans des petits pots de taille inégale. [...] La pelle, les pincettes et le bec du soufflet, tous de proportion colossale, brillaient comme de l'acier poli, tandis que le long des murs s'étendait une abondante batterie de cuisine, où miroitait inégalement la flamme claire du foyer, jointe aux premières lueurs du soleil arrivant par les carreaux.》M.B., p.304.
- 7) Cf. Anthelme Brillat-Savarin, *La Physiologie du Goût*, Flammarion, 1982 または、辻静雄『ブリアーサヴァラン「美味礼讃」を読む』(岩波セミナーブックス32) 岩波書店 1989。  
ところで、筆者はこの拙論ではあえて「食べる姿勢」から分けたが、定評ある料理大事典 *Larousse Gastronomique* では「食べる人」という観点から階層別に、下から《goinfre》《goulu》《gourmand》《friand》《gourmet》《gastronome》の順で並べている。*Larousse Gastronomique* (以下 L.G. と略記), Librairie Larousse, 1984, p.494. この記述の仕方は、食を前にした人のあり方が「単なる行儀作法」などにとどまりはせず、即その人物の「教養、人となり、全人格」を体现するという、フランスにおける一種の共通認識を理解させるも

のとなっている。

- 8) 例えば Marguerite Perrot は、その著 *Le Mode de Vie des Familles Bourgeoises 1873-1953* (Press. Fond. nat. scien. pol., 1972) の中で、食物の摂取の変遷についてはそれぞれの時代の経済が必ずしもその要因となっていたわけではなく、人々の嗜好（いい換えれば思想）が大きく作用していたことを明らかにしている。
- 9) G. Flaubert, *Souvenirs, Notes et Pensées intimes*, Buchet/Chastel, 1965. [G. フローベール「思い出・覚書・瞑想」『フローベール全集』第8巻、筑摩書房、1976 P. 238] この言葉は、Brillat-Savarin の aphorisme 2「禽獣は食らい、人間は食べる。教養ある人にして初めて食べ方を知る」のもじりか。
- 10) Gustave Flaubert, *L'Education Sentimentale, Flaubert Œuvres II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1979, p. 320.
- 11) エラスムスは「魚喰い」で、精進潔斎を至上とする形骸化してしまったカトリック信仰のあり方を批判している。その中で肉屋は魚屋にこう見え方を切る——「からだ以外には害を与えないというのなら、まだ大目にみてもよからう。ところがおっとどっこい、食い物の変化は精神器官に悪影響を与えるもんだ。その結果は魂そのものが冒されちまうってことよ」二宮敬訳『エラスムス／トマス・モア』（中公世界の名著）中央公論社、1980, p. 285.
- 12) andouille: 「豚の可食部分（多くは臓物を含む）に、場合により他の家畜の可食部分を加え、豚の大腸に詰めて作ったソーセージ」L.G., p. 36.  
四旬節 carême, 聖金曜日 vendredi saint とは相容れない食物である。禁欲と食欲、または精神と肉体の相克を象徴し、ラブレーはパンタグリュエル物語 *Pantagruel* 『第四之書』に、精神潔斎坊の敵で楽火曜日 mardi gras（謝肉の火曜日）を守護神とする凶暴なアンドゥイユ族（渡辺一夫訳では「腸詰族」）を登場させている。
- 13) 「一人きりの食事はあまり好きではありません。私自身を楽しませるものが、他の誰かの連想と結合してほしいと思うのです」G. Flaubert, *Lettre à Georges Sand*, 23-24 janvier 1867.
- 14) 「低劣なことにばかり気をつかい、商人のような会話をしていると、精神が穢れていくような気がして絶望的になります。まるで乾物屋になったような気持ちです」G. Flaubert, *Lettre à Madame Brainne*, 10-11 décembre 1878.
- 15) ブールニジャン司祭を初めとしたエマの周辺にいる人物の極楽とはすなわ

ち、古くはブリューゲルが農民の夢として描き、またフロベールの時代には彼の嫌ったベランジェがいかに19世紀的に《Voyage au pays de Cocagne》と歌った食の桃源郷 pays de cocagne である。フロベールは、こうしたブルジョワ的な夢をさらに「ポトフ王国 royaume du pot-au-feu」と矮小化して、戯曲『心の城』*Le Château des cœurs* でとり上げている。Cf. Maurice Bar-dèche, *L'Œuvre de Flaubert, Les Sept Couleurs*, 1974, pp.270-277。

ちなみにポトフという語は、《personne pot-au-feu》（「家庭での安逸、安楽を優先する人間」の意）というように用いられる。Cf. 註20)の bouilli。

- 16) Charles Beaudelaire, *M. Gustave Flaubert, Madame Bovary et la Tentation de Saint-Antoine*, L'Artiste, 18 octobre 1857, reproduit *L'Art Romantique*, Lévy, 1868. [『フローベール全集』第9巻、筑摩書房、1976]
- 17) 結婚のアレゴリー——《A la base, d'abord c'était un carré de carton bleu figurant un temple avec portiques, colonnades et statuettes de stuc tout autour dans des niches constellées d'étoiles [...] ; puis se tenait au second étage un donjon [...] sur la plate-forme supérieure, qui était une prairie verte [...] des rochers avec des lacs de confiture et des bateaux [...] on voyait un petit Amour, [...] deux boutons de rose naturelle, en guise de boules, au sommet.》*M.B.*, p.317.
- 18) 19世紀、食の楽しみがブルジョワジーの手の届くところとなってから、料理の命名の仕方はしだいに具体的な料理法から遠く離れていく。高級料理店で有名人がある料理を食べれば、その料理はそれ以来その人物の名をつけて「～風à la」となり、新しもの好きのブルジョワの口に入る。歴史、芸術、文学、貴族社会の代表的人物の名が次々と何でもない料理に与えられた。食べ手は、手の届かぬ天上人の威光をその料理を体内にとり込むことによってわがものとしたのだという幻想をもつのである。「言葉が料理を取り巻き、料理はその道徳的、美学的、政治的主張を盛り込む」Jean-Paul Aron, *Le Mangeur du XIX siècle*, Robert Laffont, 1973. また様々な「～風」の例と意味については、L.G.を参考のこと。フロベール自身、青年時代の友人でルアン的高级レストランの主人であったジェから「甘いアントルメ、フロベール風プディング」を捧げられ、それを嬉しげに報告している。G. Flaubert, *Lettre à Chevalier*, 13 août 1845.
- 19) 《Quelquefois aussi, elle lui parlait des choses qu'elle avait lues, comme d'un

passage de roman [...] ou de l'anecdote du *grand monde* [...] ; car, enfin, Charles était quelqu'un, une oreille toujours ouverte, une approbation toujours prête. Elle faisait bien des confidences à sa levretté. Elle en eût fait aux bûches de la cheminée et au balancier de la pendule.》*M.B.*, p.348.

- 20) bouilli : 「ポトフやブイヨン, コンソメをとるのに使った牛肉, ゆで肉」*L.G.* p.135.フロベールは書簡にいう——「私がブイイを嫌うのは, それが何よりも庶民の家庭における典型的料理であるためだ。誰でもがそれを食べ, 美味しいと思っているのだから」*G. Flaubert*, décembre, 1847. Cf. 註15)
- 21) ロドルフの独白(*M.B.*, p.410)の中でエマを指す代名詞が《elle》から《on》, さらに《ça》《cela》あるいは《ce》としだいに変わってきていること。彼女はロドルフの考えの経路の中で, 主体であるところから, 快樂のために愛される対象物, しまいには用をすませた後で投げ出す品物へと変わっていく。*Albert Thibaudet, Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p.112.
- 22) biscuits de Reims : 「軽くサクッとした口当たりの小さな四角形のビスキュイ。粉糖をたっぷり使い, ヴァニラで香りづけされている。かつてはかなり甘味が強く, 特にシャンパンとともに味わわれた」*L.G.* p.108.
- 23) M.バルガス=リヨサ『果てしなき饗宴—フロベールと「ボヴァリー夫人」』筑摩書房(筑摩叢書319)工藤康子訳 pp.202-204.
- 24) déguster : 酒などを「味わって飲む」また「ひどい目に会う」の意も。
- 25) malvoisie : 「ギリシャはペロポネソス原産のデザート用甘口葡萄酒。かつてクラランス公は兄弟であるイギリスのエドワード4世を欺いた咎でこの葡萄酒の樽に漬けられて死刑に処された」*L.G.*, p.597.
- 26) Cf. 拙論「『ボヴァリー夫人』—その表現者の個性としての描写(2)」(『周辺』13号) 1994。
- 27) Roland Barthes, *Brillat-Savarin/Physiologie du Goût avec une Lecture de Roland Barthes*, Hermann, éditeurs des sciences et des arts, Paris, 1975, p.21 [『ロラン・バルト「味覚の生理学」を読む』松島征訳, みすず書房 p.34]
- 28) Sainte-Beuve, *Variété, Littérature : Madame Bovary*, - Le Moniteur, 4 mai 1857, reproduit *Causerie du Lundi, X III*, Paris [『フロベール全集』第9巻, 筑摩書房, 1976]
- 29) 工藤庸子氏は「美食を知ったためにエンマはいっそう不幸になった」「生涯に一度だけ食べることの快樂[...]その代償を支払うかのように, その後

彼女は拒食症になってしまう」と述べている。工藤庸子『フロベールの《果てしなき饗宴》』（特集『味覚—「おいしさ」をどう表現するか』言語生活'83, No. 382, pp.46-47). 無論それは、エマの欲望の対象と当夜の美食が密接に結びついているためである。

30) G. Flaubert, *Lettre à Louis Bouillet*, 25 août, 1856.

31) 商人ルゥルーのもってきた贅沢なショールを購入しなかった「立派な」自分を意識し、同時に自分のしたい気ままができそうだという見通しが開けたとき (P. 386) ; レオンとの初めての情事から戻った夜、父の死に沈むシャルル前にして (P. 520) ; 金に糸目をつけぬレオンとの蜜月 (P. 524, P. 543)。

32) フロベールはエマの食の情景よりも、彼女の愛欲の日々を描写するのに「食」を連想させる語を好んで用いている。倦怠、嫌悪には《affadissement》や《dégouté》, 喜びには《savourer》《rassassier》《friand》etc.

33) G. Flaubert, *Lettre à Louise Colet*, 29 novembre 1853.

34) G. Flaubert, *Lettre à la même*, 8 octobre, 1846.

35) フロベールが人間の愚劣を嘲笑するべく書き進めた未完の小説『ブヴァールとペキュシェ』には、二人の書記が缶詰め、漬けもの、酢、梅のブランデー漬の製造、シャンパンの醸造などの研究を続けていく様子が描かれる：「彼らはアペール氏[Cf.註37])のように『季節を固定させた』とって嬉しがった。ペキュシェにいわせれば、かくのごとき発明は征服者の功績にも勝るものである」G. Flaubert, *Bouvard et Pécuchet, Flaubert Œuvres II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1979, p.758.

36) 保存食品とフランス人の関わりについて Jean-Paul Aron は「通常の流れに逆らって自然をグラスの中に掠めとったり、瓶の中にしまいこんだり、我がものにしたりすること [...]には自然のエネルギーに対するフランス人の要求が脈打っている」と述べている。前記 *Le Mangeur du XIX siècle*.

37) Nicolas Appert (1749-1841) 食物の瓶詰めによる長期保存法を開発し、保存食品業の発展に大きく貢献した科学者。その滅菌法は《Appertisation》と呼ばれた。

38) 「身を立てるといって、一体どこにだ。ミュルジュ、ファイエ、モンズレなど [...] その他有象無象とともに並び立つのか。ごめんだよ。名を上げるなんて僕にとっては第一義的なことではない」G. Flaubert, *Lettre à Du Camp*, 26 juin 1852. 中でも Charles Monselet (1825-1888) は当時自他ともに認め

る《gastronome》として美食術・著述家として活躍していた。

- 39) 「僕は神聖な生活を送っている、あれほど多くの欲望をもって生まれた僕なのに。しかし忌ま忌ましい文学のやつがそれらの欲望のことごとくを僕の腹の中に押し戻してしまった。[...]僕はすでに自分の身を食らい始めてしまった」 G. Flaubert, *Lettre à Ernest Feydeau*, 21 octobre 1860.
- 40) G. Flaubert, *Lettre à Louise Colet*, novembre 1851.
- 41) G. Flaubert, *Lettre à Ernest Feydeau*, juin 1861.